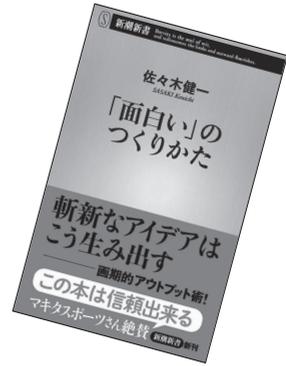


## 「面白い」のつくりかた

著者 佐々木 健一  
出版 新潮新書  
発行 2019年9月13日



教職に就いて久しいが私が現場で意識していること、それは生徒に対して如何に「面白い」を伝えるかである。

意識するようになったきっかけは自身の教育活動だ。教壇に立ってから10年ほどは、生徒に知識と技術を教授することが最も重要で、生徒が「面白い」と感じているかどうかなど気にしたこともなかった。2校目の赴任先で担当した「課題研究」は生徒に個人研究をさせていたのだが、ある年に誰一人として簿記会計分野をテーマに挙げる者がいなかったことに気づいた。3年間で簿記会計分野の授業に10単位もかけたにも関わらずだ。財務情報を企業経営や市場と結びつけることで簿記会計分野が面白くなるということを全く伝えていなかった自分を、大いに反省したのを記憶している。生徒が学校で過ごす時間を有意義に感じるためには、私たち教師が「面白い」授業を提供しなければならないし、「面白い」と感じてもらえるような仕掛けも研究しなければならない。私は自分の経験からどの科目においても、できる限り「面白い」授業を意識するようになった。

「面白い」という言葉には、「興味をそそられて、心が引かれるさま」という意味が含まれている。この言葉どおりの「面白い」授業の実現を私たち教師は追求し続けているのだが。

生徒の興味は多種多様なので、教師が教授する内容と生徒の興味を結びつけるのは一筋縄ではいかない。また、心が引かれる授業とは用意したコンテンツのみならず、授業の構成や生徒の感情に訴える仕掛けも必要だ。このように、理想とする授業の実現はなかなか困難を極める。

さて本題に入ろう。私がオススメする本の著者である佐々木氏はNHKの

ディレクターである。テレビマンとして「面白い」とは何かを追求した成果をこの本ではふんだんに述べている。目次は以下のとおりである。

## 目次

- 第1章 そもそも「おもしろい」って何？
- 第2章 アイデアは思いつきの産物ではない
- 第3章 学び（取材）からすべてが始まる
- 第4章 「演出」なくして「おもしろい」は生まれない
- 第5章 「分かりそうで、分からない」の強烈な吸引力
- 第6章 「構成」で面白さは一変する
- 第7章 「クオリティー」は受け取る情報量で決まる
- 第8章 現場力を最大限に発揮させる「マネジメント」
- 第9章 妄執こそがクリエイティブの源である

特にオススメしたいのが、第1章から第6章の内容だ。「面白い」を演出するためのノウハウが詰まっており、読んだ人がすぐにでも挑戦したいと思えるはずだ。

ちなみにこの本との出会いは、話題の本.comに掲載されていた【話題の本】『現役東大生おすすめの本』40選！【文系編】である。東京大学といえば日本の最高学府であり、その卒業生の多くは、官僚や一流企業で日本を牽引する人材となる。この本を読めば、東大生が求める「面白い」に触れることができると思ったのだ。

学生のみなさんも「面白い」ことや「面白い」の伝え方に興味があると思うので、ぜひとも読んでいただきたい。

起業教育研究会 企画委員  
兵庫県立長田商業高等学校  
清水 秀樹